# 福島第一原子力発電所事故と3年目の夏

----- 南相馬市でのボランティア体験から ------

## 工藤 康紀

一般科理系

東北地方太平洋沖地震とそれに続く大津波によって、関東から東北地方の広い地域は未曽有の被害を受けた.さらに、津波によって全電源を喪失した福島第一原子力発電所では、3つの原発がメルトダウンを起こし、多量の放射性物質を大気中に放出した.そのため周辺の多くの住民が緊急に非難を余儀なくされ、多くの地区で今でもその避難生活が続いている.それら地区の一つである福島県南相馬市で5回にわたってボランティア活動に従事したので、今回はそこで体験したことを中心に報告する.

キーワード: 東日本大震災,災害ボランティア,南相馬市,福島第一原発

#### 1. はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の後, 東北地域に6回ボランティア活動に行ってきた.そのうち, 5回は福島県南相馬市での活動である.主な理由は,前回 に書いたように<sup>1)</sup>そこでは東京電力福島第一原子力発電所 (以下,福島第一原発と略記)の事故によって放射線によ る被害が続いており,助けを必要とする人がいるからである.

阪神淡路大震災後の復興過程については詳しくは知らないが、今回の東北地方太平洋沖地震による被害は地震そのものによる被害以外に、津波による被害、福島第一原発事故による放射線被害なども加わり、阪神淡路大震災からの復旧復興とは比べ物にならない支援が必要だと感じている。例えば、今年著者が出かけて行った福島県南相馬市小高区では、今まさに三重苦(地震・津波・放射能汚染)の生活が続いているといって良いだろう。福島第一原発の事故以来、この2年半のボランティア活動の間に福島県南相馬市がどのように変化して来たかを記すことにより、皆さんに原子力発電所事故による放射線汚染の実態を知っていただきたい。これまでに南相馬市で延べ24日間の活動をしてきた。その間に見てきた変化を記すことにする。ただし、ここに書いてあることが現地の全てではないことをお断りしておく。

#### 2. 南相馬市でのボランティア活動

東北地方太平洋沖地震が起きてから約4か月半後の

2011年7月に初めて福島県南相馬市でのボランティア活動に参加して以来、南相馬市にはこれまでに5回行き、延べ24日間の活動をしてきた.その後この2年半の間に変わった所もあれば、ほとんど変わってない(復旧復興が進んでない)ところもあることが分かってきた.

南相馬市は南北に長い街で、北から(福島第一原発に遠い順に) 鹿島区、原町区、小高区の3つの区がある。この3つの区は、福島第一原発の事故による放射線汚染の程度の違いから警戒区域の指定に差が生じ、その結果その後の復旧復興に大きな差が生じている。

汚染度の低かった鹿島区はそのほとんどが住民の避難 区域とはならずにいた.そのため、仮設住宅の建設などが 比較的早く進んだ.実際、原町区や小高区の住民の仮設住 宅は、当初そのほとんどが鹿島区に建設されて、その後も 続いている.

次に、原町区は当初「緊急時避難準備区域」に指定された。そのため、小中学校や高校は区域外の場所に校舎(教室)を借りて授業を進めることとなった。原町区の児童生徒の一部は自宅から送迎バスにより通学したり、仮設住宅から通ったりした。震災4ヵ月半後に原町区に行ったときには街の住民の多くが区外に避難していた。そのため、街はひっそりとして、子どもを街で見かけることはほとんどできなかった。さらに、福島第一原発から20km圏内にあった小高区の住民は、全員が区外に避難せざるを得なかった。もちろん、当初は放射線の影響を恐れて県外に避難した人も多く居た。特に、小さな子どものいる若い人は県外に避難した人がたくさん居て、今でもそのまま県外に留まっている人も多い。

原町区では、2012年4月に警戒区域が解除され、住民の

帰宅が少しずつ始まり、2013年9月現在では津波で家を流された人を除いてほとんどの人が帰宅している.小中学校や高校も津波や地震の影響が小さかったところでは元の校舎で平常通りの授業を再開している.もちろん、その前に学校内は除染をすることが必要で、そのために発生した瓦礫や放射能で汚染された土は校庭の端にシートで覆われて置かれているか、校庭の地面下に埋められている.汚染土の置場が決まらないからだ.このように街中は元の生活が戻ってきたように見えるが、一歩郊外に出ると、そこにある田畑には何も作られてない所が多いことがわかる.主な理由は、放射線量が高くて収穫した作物の出荷ができないことと、田んぼについては排水設備の改修が終わってないために水を溜めることができないからである.

一方, 小高区の大部分は, 2012年4月に「避難指示解除 準備区域」となったものの立入は昼間だけに制限されてお り、2013年9月現在、インフラの整備が遅れ、未だに昼間 の立入しか認められていない. そのため, 住民は避難先か ら時々家の様子を見に帰る程度で, 小高区以外に住んでお り不自由な生活が続いている. 実際, 2012年の夏に家の 周囲の草刈りや庭木の剪定に行った家では、2013年の夏 にも同じようなことでボランティアとして手伝った. この 1年以上時間は止まったままである. その家の家族は、現 在通常は山形で生活しており、年に1回の草刈りと家の手 入れのために帰宅していると言っていた. 或いは、別の小 高区の住民は、これまでに何回か帰宅することはあったが、 家の周囲の手入れは何もできずにいて, 今回ボランティア の手伝いによって3年目の夏になって初めて家の周囲の手 入れができたと言って、涙を流していた. また、海岸近く の家では、津波による堆積物はボランティアの力によって 撤去することができたが、それらの堆積物を入れた土嚢の 置き場がないために、土嚢は家の敷地の端の方に積み上げ たままになった. (図-1) 放射線に汚染された瓦礫や堆積



図-1 家の前に積まれたままの汚染土の土嚢

物の受け入れ先が決まらないために,この先いつまで庭先 に積まれたままになるかは不明であるとのことだった.

このように放射線の汚染度の違いによってその地区の 住民の生活は大きく異なっている. 汚染度の高い小高区で は今後いつまで今のような生活を続けなければならない のか, まったく見通しがたってない. 除染も進んでいない ので, たとえインフラの整備が進んだとしても帰宅して住 み続けることは不可能となっている.<sup>2)</sup>

東日本大震災でのボランティア活動というと瓦礫の撤去や土砂の片付け等を思い浮かべる人が多いかもしれないが、最近では仮設住宅に住んでいる人への援助も大切なボランティア活動の一つとなっている。特に、南相馬市では、若い人は放射線を気にして県外に避難している場合が多く、仮設住宅に住んでいるのは高齢者がほとんどである。彼らは出歩くことが少なく、時として孤独死することさえある。そのため、ボラセンでは仮設住宅を毎週訪問し集会所で健康診断と共に「サロン」を開いている。著者もそれらのサロンの一つに参加させてもらった。ただし、慰問団のようなことは出来ないので、これまで地域の子ども達にやってきた「科学教室」を実施した。その中では針金と割り箸を使った「ガリガリトンボ」の作成が大変喜ばれた。手を使って自分で工作し遊べるので楽しんでもらえたようだ。(図-2)



図-2 サロン;ガリガリトンボで遊ぶ

### 3. さらに南へ(福島第一原発に近づく)

南相馬市小高区のボラセンの休みの日を利用して、南相馬市の南に位置する浪江町に行ってみた。ここは南相馬市よりも福島第一原発に近いため放射線量が高いので、現在も基本的には地元住民だけが昼間に限って入ることができる地域であるが、特別に依頼して入れてもらった。ここに来ると街の様子は一変する。まさに地震直後の風景がそのまま残されている。(図-3) 道路にあったと思われる瓦礫等は、かろうじて車一台が通ることができるまでに広げ



図-3 道路にはみ出たままの被災家屋

られているが、それ以外は地震直後の様子そのものである. 道路のすぐ脇から雑草が生い茂り、人手が全く入ってないことが分かる.少し人気のない郊外をレンタカーで走っていたら、目の前に雉の親子が出てきた.(図-4)しかし、彼らはすぐには逃げようとしなかった.原発事故が起きて



図-4 道路わきに出てきた雉の親子

すでに2年半が過ぎ、ここは雉の天国になっていることを 彼らは良く知っているのだろう. 道路わきの田畑はすでに 草茫々となり動物の天国となっていた. 南相馬市小高区で は、ボランティアが入って草刈り等ができるが、浪江町は それさえできずにいる. それだけ、放射線量が高いといえ る.

一方, 浪江町の海岸線に近いところでは, 田んぼに残された津波で潰された車に「フジツボ」がびっしりと着いていた. (図-5) 地元の人の話では, 震災後この一帯は地盤沈下と停電によって排水機が使えなかったために田んぼは海水に浸かったままになり, 残された車にその間にフジ



図-5 田んぼに残された車に付着したフジツボツボが着いたらしいとのこと.

#### 4. 今後に向けて

最近,南相馬市社会福祉協議会のブログ<sup>3)</sup>に次のようなことが書かれていた.

『ボランティアさんの数が減ってきてます! 南相馬市の復旧・復興にお力をお貸しください!! 南相馬市社会福祉協議会 南相馬市災害復旧復興ボランティアセン

ター(通称:社協ボラセン)』

これはどういうことかというと、上にも書いたように南 相馬市小高区のボランティア活動は一度行って作業をす ればそれで終り、というものではないということである。 住民は仮設住宅や借上げ住宅などに避難しており、元の家 の周りの草刈りや庭木の剪定等は、家に住めるようになる まで毎年遠方から出かけて行ってしなければならない。し かも、それがいつまで続くか分からない。除染が実施され インフラが整備され住民が住めるようにまで、おそらく毎 年続くことになるだろう。

ただし、岩手県や宮城県ではボランティアの募集は同じ 県内や地域内に限定している所が最近は増えている。全国 からの受け入れをしているところは減っているので、今後 の東北地方のボランティア活動を考えている人は全社協 のホームページ4等を参考にすることが必要である。

ところで、今年8月に南相馬市のボラセンで活動している時に、地震や津波の被災地である南三陸町から来ている O氏に会った。これには本当にビックリした。自ら地震や津波によって被災しながら他の被災者の援助に行くということにまさに「絆」を感じた。話を聞くと、彼は漁師であり今回の地震により漁業を続けるための道具・資材のほとんどを失った。しかし、その後少しずつ復活し、現在はホタテ漁の稚貝を仕込んでいる状態とか。稚貝が育ち出荷できるまでには2、3年掛かるとかで、それまでは震災で苦しんでいる人の助けができるからと時々南相馬市にボランティアに来ているらしい。彼は現在仮設住宅に住んでおり、自分の街の復興計画が決まらないため、津波で流された自分の家は元の場所に建てることができない。そのため、それまではすることがないからあちこちのボラセンにでかけているという。

#### 参考文献

- 1) 工藤康紀:東日本大震災・原子力発電所事故に伴うボランティア活動,大分工業高等専門学校紀要, No.48, pp. 1-3, 2011.
- 2) その後, 今年の10月から除染が始まるとの情報もある.
- 3) ブログ: http://ameblo.jp/minamisoma-svc/
- 4) http://www.saigaivc.com/

(2013.9.30受付)